



Data 2025-39
監督: キム・デウ
出演: ソン・スンホン/チョ・ヨジョン/パク・ジヒョン

👁️👁️ みどころ

映画産業が斜陽となった1970年代、邦画界は日活ロマンポルノに活路を求めたが、それも一時的な“あだ花”に終わった。

他方、韓国では「高級エロティシズム映画の巨匠」たるキム・デウ監督が、人間の〈秘密〉と〈欲望〉を立体的に探求した結果、所有したい者と奪いたい者同士が、手に入れ、奪い、また奪われる映画を発表！

まずは、『秘顔-ひがん-』というタイトルに注目！人間には誰にでも“秘密の顔”があることを、弁護士50周年を迎えた私は痛感しているが、激しい情愛に溺れる指揮者とチェリスト、すべてを目撃する婚約者の3人に、それぞれこんな“秘密の顔”があったとは！？遂にそのペールを脱いだ【R-18+】禁断のエロティック・スリラーをしっかりと鑑賞したい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■タイトルに注目！こんな日本語はないものの、なるほど！■□■

本作のタイトルとされている「秘顔（ひがん）」は、日本語にはない言葉だ。しかし、「激しい情愛に溺れる男女と、そのすべてをすぐ“そこ”から見つめる婚約者の3人には〈秘密の顔〉があった。」という本作の“売り”を見ると、なるほど、なるほど。

弁護士稼業を50年もしていると、人間には誰にでも“秘密の顔”があるものだということがよくわかるが、それを「秘顔（ひがん）」とは言い得て妙だ。

■□■別れの告白からスタート！楽団内の混乱は？■□■

本作冒頭、婚約者のソンジン（ソン・スンホン）に対して、「私はこれから1人でベルリンへ行きます。さようなら。」と告げる女性スヨン（チョ・ヨジョン）の姿が映し出される。そこでソンジンが困惑したのは当然だが、それは交響楽団の楽団長をしているスヨンの母親も同じだ。しかし、調べたところでは、スヨンの出国の記録がない上、携帯もカードも

使った形跡がないから、アレレ、アレレ。母親は娘のわがままに激怒しながらも、ソンジンには「どうせすぐに帰ってくる」と余裕を見せていたが、母親と対立している事務局長は、公演のリハーサルを進めるためにチェリストの代役を立てるべきだと提案。板挟みになったソンジンは喪失感で苦しみながら、スヨンの後輩であるチェリストのミジュ（パク・ジヒョン）を面接することに。

ここまでのストーリーには納得だが、スヨンのベルリン行きには何か裏がありそう！そう思っていると案の定・・・。

■□■ “売り” は密室スリラー！鏡の後ろに隠された欲望！ ■□■

本作の「オンライン試写のご案内」には、「格が違う！〈19禁〉密室スリラー」、「大胆露出、それ以上の衝撃！」、「鏡の後ろに隠された欲望、予測できないエンディング」、「あなたが覗くのは、欲望の最狂到達点」の見出しが躍っている。1960～70年代、テレビの発展によって斜陽産業になってしまった日本映画は、(日活) ロマンポルノに活路を求め、一時的に成功を収めたが、その人気も長くは続かなかった。しかし、映画界におけるエロティシズムや官能路線への人気は根強いから、その上に、「密室スリラー」や「大胆露出、それ以上の衝撃！」等を追加すれば、そんな作品は大ヒット！

そんな狙いで作られた本作は、スヨンの代役チェリストとして面接を受けたミジュと、その面接をしたソンジンとの間で、早々に想定通りのベッドイン・ストーリーが進んでいくので、まずはそれに注目！それ自体は極めてありふれた設定、凡庸なストーリー展開だが、実はその裏では・・・？一転してスクリーン上に、3ヶ月前の物語、さらに7ヶ月前の物語が登場してくると・・・？

■□■ 大成功した若き指揮者の出自は？新妻との力関係は？ ■□■

貧しい青年が努力して指揮者になったものの、その裏には大きな秘密が！そんな設定で生まれた邦画 No.1 の傑作が、野村芳太郎監督の『砂の器』(74年) (『シネマ 43』343頁) だった。それと同じように(？)、本作の導入部のストーリーから一転して3ヶ月前に遡ると、それはスヨンとソンジンの2人が旅行先から韓国に戻ってくるストーリー。2人は婚約者同士だが、主導権を握っているのがスヨンであること、スヨンがわがままいっぱいに育った“女王サマ”キャラであることは明白だ。そんな2人が新たに住む、母親が提供する大邸宅はスヨンの注文通りに豪華に補修され、仕上がっていたから、スヨンはもとよりソンジンもそれにご満悦だ。

しかし、導入部のソンジンとミジュの情欲シーンを見ていると、ソンジンの心の中には、自身の出自についてのコンプレックスや、スヨンに対する不満が大きく鬱積していることがよくわかる。なるほど、なるほど、導入部で見た豪邸内にミジュを引っ張り込んでの強烈な愛欲シーンは、楽団長の母親にも、婚約者のスヨンにも頭が上まらないソンジンの鬱積した不満から出たものなの？しかし、それにしても、冒頭に見たスヨンのソンジンに対する別れの告白とベルリン行きは一体なぜ？

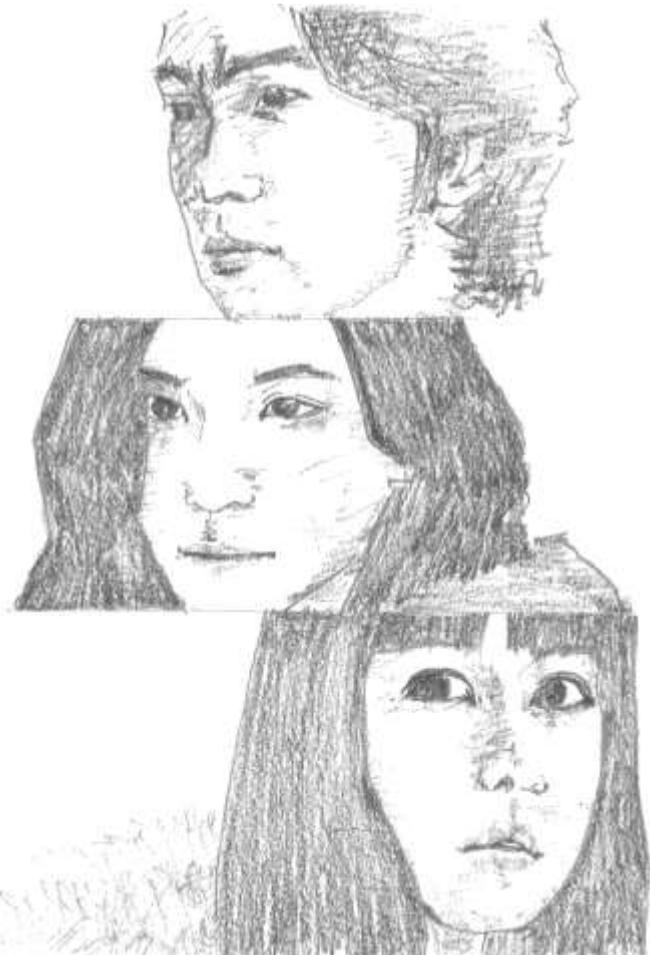
■□■ “監禁モノ” に急転換！女同士の間関係と2人の密約は？■□■

私は、『完全なる飼育～女理髪師の恋～』（03年）（『シネマ9』348頁）や『完全なる飼育～秘密の地下室』（03年）（『シネマ3』362頁）をはじめとする「監禁モノ」が大好きだ。しかして、本作でも物語が3ヶ月前に遡ると、そこでは女王様キャラのスヨンと奴隷キャラのミジュが、ソンジンとスヨンの新居になる豪邸に接続する“秘密の物置”を舞台とした、「監禁モノ」然としたストーリーが展開していくので、それに注目！

かつての日活ロマンポルノなら、この密室内での女同士の愛欲シーンが大きな見どころになるはずだが、タイトルを「秘顔」とし、前記のテーマを追及した本作では、最近冷たくなったソンジンに不安を覚えるスヨンが、自分の言うことは何でも聞くミジュとの間で、“ある密約”を交わすところから、がぜんスリラー色が濃くなっていく。その“密約”とは、自分が失踪した

後ミジュを後任のチェリストに推薦することによってソンジンの行動を探り、ソンジンの真意を確認することだ。去る3/20に観た『スイート・イースト 不思議の国のリアン』（23年）（『シネマ57』56頁）では、トイレの鏡の向こうが異世界に通じていたが、本作では豪邸の洗面所の鏡が秘密の物置に通じているからすごい。

すると、洗面所のドアと寝室のドアを開けばなしにしておけば、ベッド上でのソンジ



ンとミジュのあられもない性交渉の姿は、鏡の向こうの倉庫内にいるスヨンからは丸ミエ！？もちろん、そんな状況はスヨンが想定したものではなかったが、忠実な奴隷だったはずのミジュが、こともあろうに女王サマのソヨンを裏切り、ソヨンを倉庫内に閉じ込めてしまったばかりか、そこから鏡越しに豪邸内を観察することができることを知った上で、自分とソンジンの激しい情欲シーンをスヨンに見せつけていたとは！なるほど、なるほど。清純な雰囲気でも可愛い顔をしたミジュだが、やっぱり女は怖い！？しかし、なぜミジュはスヨンに対してそんな裏切り行為を？

■高級エロティシズム映画の巨匠の演出と狙いに注目！■

本作後半では、目の前の壁に掛かった大きな鏡の前にある洗面台と水道が“壁越しの会話”をするについての重要な小道具となる。すなわち、この鏡はいわゆる“マジックミラー”になっているため、秘密の物置内にいるスヨンからは、洗面所にいるソンジンのミジュが見えるけれども、その逆は見えないわけだ。しかし、水道を流れる水の微妙な変化をソンジが発見すると・・・？合理的に考えれば、秘密の物置からハンマーで思い切り壁（鏡）を叩き続ければ壁を壊すこともできそうだが、スリラー色が深まっていく本作の展開の中でそんな現実的なことは言っこなしだ。しかし、鏡越し（マジックミラー越し）で、監禁状態にあるスヨンとの「会話」を実現させたソンジンのその後の行動は・・・？

日活ロマンポルノの全盛時代には、さまざまなエロティックな形容詞が幅を利かせていたが、本作のプロダクションノートによると、「異色の密室スリラー！斬新な設定と逆転、大どんでん返しのサスペンス」たる本作を監督したキム・デウは、古典小説「春香伝」を現代的に再解釈した映画『春香秘伝 The Servant』(10年)と、禁断の愛と欲望を美しくも緊張感たっぷりに描いた『情愛中毒』(14年)で確かな演出力を認められ、生々しいエロティシズムと格調高さを鮮やかに融合したため、「高級エロティシズム映画の巨匠」と呼ばれているようだ。そんな彼は、本作について、「人間の＜秘密＞と＜欲望＞を立体的に探求し、所有したい者と奪いたい者同士が、手に入れ、奪い、また奪われる映画だ」と語っているから、なるほど、なるほど。本作を鑑賞した後は、「所有したい者」とはスヨン、「奪いたい者」とはミジュという2人の女性であることは明らかだから、これはまさに言い得て妙だ。

邦画では最近エロティシズムたっぷりの名作は少なくなったから、せめて韓国の「高級エロティシズム映画の巨匠」による、人間の＜秘密＞と＜欲望＞を立体的に探求した本作をしっかりと楽しみたい。

2025（令和7）年4月15日記